

## 意見文における譲歩構造の機能と位置

### — 「確かに」を手がかりに—

伊集院郁子

#### 要旨

日本語意見文における譲歩構造（「譲歩」＋「反論」）の実態を探るために、「確かに」という表現を手がかりに、日本語母語話者による意見文 134 編を分析した。日本語学習者による日本語意見文との比較も試みた結果、次のような特徴が見られた。

- ① 「確かに」を用いた「譲歩」の主な出現位置は、「主張」を明示した直後と、「主張」をサポートする「根拠」の中である。前者の場合は、異なる立場の見解にも理解を示し、いったん「主張」を和らげてから「反論」を加えることで「主張」を強固にしようとする機能、後者の場合は、自らの「根拠」の弱点に言及し、それを補う特徴を示して「反論」することで、「主張」を支える「根拠」を盤石にしようとする機能を担っている。
- ② 「反論」の典型的な形式は、「確かに～。しかし、～。」と「確かに～が、～。」であり、「反論」までの間に文が挿入されるパターンも含めると、全体の 89% を占める。
- ③ 日本語学習者には、意見文の末尾での「確かに」の使用、「反論」の際の口語的表現（「でも」「けど」）の使用が、日本語母語話者に比して多く見られる。

#### キーワード

意見文、譲歩構造（「譲歩」＋「反論」）、「確かに」、機能と位置、上級レベル

#### 1. はじめに

「日本留学試験」の「記述」問題で意見文の執筆が求められている影響もあり、日本語教育機関で意見文を指導する機会が増えている。適切な根拠を挙げて主張を展開していく「意見文」<sup>(1)</sup>の執筆に際しては、主張を支えるのに妥当な根拠を論理的に文章化する能力が求められる。2009年度までの日本留学試験の採点基準からも、「執筆者の意図が明快に理解可能」で、「主張に根拠が示されており、かつ、主張と根拠との間に十分な論理的関係があり、矛盾が認められない」ことが重視されているのがわかる<sup>(2)</sup>。

大学に進学を目指す留学生は、進学後「レポート」の作成が必須となるため、予備教育期の上級段階では、レポートで主張を展開する際にも応用できる「意見文」の練習が必要となる。レポートでは、単に自分の主張を支える根拠を複数列挙するだけでなく、反対の立場の見解も加味したうえで、それに反論を加えることによってさらに自分の主張を強化させるような技能が求められる。本稿では、これを「譲

歩」+「反論」と呼ぶ。日本人の大学生を主な対象として作成された文章表現の教材でも、想定される反論に言及した上で、その反論への答えを示すことの必要性が明記されている（大島他 2005, 森下・鴨川 2007）<sup>(3)</sup>。

一方、留学生が使用者として想定されている教材の中では、石黒・筒井（2009）に、対立する立場の主張とそれに対する反論の根拠を示した練習があるほか、佐藤他（1986）、山本・工藤（2001）、アカデミック・ジャパニーズ研究会（2002）、二通他（2009）でも、「譲歩」+「反論」の表現が取り上げられている。しかし、譲歩構造を全く扱っていない教材も数多く、その機能や位置にまで踏み込んで体系的に指導している教材は限られている。また、中国語母語話者（CN）と日本語母語話者（JP）による日本語意見文を比較した研究には、「CN は逆接的接続、同列・補足の接続詞の使用が JP より少ないため、主張の制限、反駁等の論理的展開が足りず、意見の説得力が弱くなると思われる。」（田代 2007, p144）という指摘もある。外国語で説得力のある譲歩や反論（反駁）を行うことは困難を伴うため、留学生を対象とした指導では表現の提示のみでなく、文章の中で論理的に譲歩構造を組み立てる練習が必要となる。

本稿では、上掲の教材全てに共通して取り上げられている「確かに」という表現に着目し、上級レベルの学習者に譲歩構造を指導するための基礎調査として、日本語母語話者（JP）の執筆した意見文 134 編に出現する譲歩構造の機能と位置、反論の形式を分析する。また、部分的ではあるが、同条件で収集した台湾人学習者（TM）による日本語意見文 57 編、韓国人学習者（KR）による 55 編との比較も試みる。

## 2. 分析データと分析方法

分析するデータの概要は、表 1 のとおりである。

表 1 分析データ概要

執筆者	作文数	本文数(平均)	段落数*(平均)	収集時期
日本語母語話者(JP)	134	2176(16.2)	553(4.1)	2007年6月～11月
台湾人学習者(TM)	57	1050(18.4)	252(4.4)	2007年12月
韓国人学習者(KR)	55	917(16.7)	243(4.4)	2009年9月

\*段落数は、執筆者が設けた形式段落の数である。

JP は、東京都内の大学に通う日本人学生である。TM は台湾の大学、KR は韓国の大学に通う、学習時間 600 時間相当以上の日本語学習者である。3 者ともに以下に示す課題文を読み、辞書などの使用はせずに、60 分以内に原稿用紙 1 枚に 800 字程度で執筆した。

## 【課題文】

下の文を読んで、自分の意見を800字ぐらいの日本語で書いてください。

今、世界中で、インターネットが自由に使えるようになりました。ある人は「インターネットでニュースを見ることができるから、もう新聞や雑誌はいらない」と言います。一方、「これからも、新聞や雑誌は必要だ」という人もいます。  
あなたはどのように思いますか。あなたの意見を書いてください。

収集したデータは、Microsoft excel を用いて一文一行に入力し、データベース化した。続いて、「確かに」が出現している文を取り出して、譲歩の機能をもつか否かを判定した後<sup>(4)</sup>、出現する位置と文章の流れの中でどのような機能を果たしているか、反論はどのように行われているかを分析した。

## 3. 分析結果

## 3. 1 譲歩構造の位置と機能

「確かに」を用いた譲歩構造が出現した回数は、表2のとおりである。これらの譲歩構造がどこで出現したか、JP データで段落<sup>(5)</sup>を単位に調べてみた結果、第一段落での出現が23例、第二段落での出現が27例、第三段落での出現が10例、第四段落以降での出現が11例であり、意見文の前半の段落で出現する割合が高いことが分かった。

表2 「確かに」を用いた譲歩構造の出現回数

	出現回数	作文数
JP	71	64
TM	30	23
KR	11	9

続いて、「確かに」を用いた「譲歩」がどのような機能の連鎖の中に位置付けられているかを分析し、「譲歩」が現れる前後の機能の流れを次のI型からVI型に分類した。

**I型** 「譲歩<冒頭の第一文>」→「反論」→「根拠」

この型は、3例のみであったが、課題文の影響を受けて出現したと思われる。課題文で2つの対立する立場が提示されているため、自分の立場と対立する方の主張を冒頭の第一文で提示し、それに「反論」してから、「根拠」に移るパターンである。

- 例 JP032-01 確かに、世界中でインターネットが自由に使えるようになり、誰でもそこで最新のニュースを見ることができるなら、新聞や雑誌はいらなくなるように思うかもしれません。「譲歩」〈冒頭〉
- JP032-02 しかしながら、今、本当に誰でも自由にインターネットが利用できていると言えるのでしょうか。「反論 (=問題提起)」
- JP032-03 今や、一家に一台パソコンがある時代となりました。「根拠」
- JP032-04 しかしこれは、全ての家にパソコンがあるという意味でもなければ、まして全ての人がパソコンを自由に扱えるという意味でもありません。「根拠」

**Ⅱ型** 「主張」→「譲歩」→「反論」→「根拠」

「主張」を述べた後にいったん「譲歩」し、「反論」した後に、「根拠」に移るパターンである。「主張」が現れる前に「背景」があるものや、「譲歩」のあとの「反論」が、「反論」であると同時に「主張」の繰り返しであるものも含めた。

- 例 JP028-01 私はこれからの時代においても、新聞や雑誌は必要だと思う。「主張」
- JP028-02 確かに、インターネットの広まりにより、私達は必要な情報を簡単にそして素早く入手出来るようになった。「譲歩」
- JP028-03 今やインターネットは私達にとって欠かせないメディアであると言えるだろう。「譲歩」
- JP028-04 しかし、インターネットにも弱点は幾つかある。「反論」
- JP028-05 まず、インターネットはそれを自由に使いこなせる環境にいない点、つまりデジタルデバイドの問題である。「根拠」

**Ⅲ型** 「背景」→「譲歩」→「主張 (=反論)」→「根拠」

自分の主張と異なる見解があることは承知しているが自分はそうは考えない、という論理の筋道で「主張 (=反論)」し、「根拠」に移るパターンである。「背景」と「譲歩」の間に「問題提起」があるものも含めた。

- 例 JP030-01 今日インターネットが普及し、新聞や雑誌で扱われる情報もインターネットから簡単に得ることができるようになった。「背景」
- JP030-02 確かに、インターネットの情報は情報伝達の速さ、動画等の映像の豊富さ、手軽さの点では新聞や雑誌より優れており、一見、新聞や雑誌は不要になったかのように思える。「譲歩」
- JP030-03 しかし、それでも私は新聞や雑誌は必要だと思う。「主張 (=反論)」
- JP030-04 まず第一の理由として、インターネットを使いこなせない人がたくさんいることが挙げられる。「根拠」

**IV型** 「根拠」の中での「譲歩」

次の例では、「新聞や雑誌は必要だ」という「主張」をサポートする「根拠」として、新聞や雑誌のメリットを列挙している部分である。「新聞はどこでも利用できる」という「根拠」を挙げたものの、一方のインターネットも無線が使えるという点で同様のメリットがあることを認め、しかし回線や電源など特定の利用環境が必要とされるので、どこでも読める新聞や雑誌はやはり必要だと「反論」している。

- 例 JP063-10 もう一つは、どこでも利用できる、という点である。「根拠」
- JP063-11 確かに現在では、インターネットが普及し、無線でも使用できたりするが、一方でインターネットが利用できる環境にない人もいる。「根拠（譲歩+反論）」
- JP063-12 そのような人々にとって新聞や雑誌がなくなることは、重要な情報源を失うことになりかねない。「根拠（反論）」
- JP063-13 やはり、インターネット回線や電源といった一定の環境が必要なインターネットに比べ、一度購入すれば誰もがどこでも読むことができる新聞や雑誌の役割は重要である。「根拠のまとめ（反論）」

**V型** 「根拠」→「譲歩」

次の例では、「新聞や雑誌は不要である」という「主張」をサポートする「根拠」を列挙した後に、パソコンは画面表示に限りがあるため斜め読みには向かないという弱点を取り上げ、しかし今後は解決されるだろうと「反論」している。

- 例 JP052-14 最後に、情報の集約制が挙げられる。「根拠」
- JP052-15 ネット上に公開されている情報は、端末さえあれば、全ての人が全ての場所で得ることができる。「根拠」
- JP052-16 一般の人が専門雑誌に触れようとする場合、大学図書館まで足を運ばなくてはならないが、全ての雑誌・新聞がデータベース化され、ネット上に公開されれば、大学に閉じこめられていた専門知は、広く一般に行きわたる可能性を得るのだ。「根拠」
- JP052-17 これは社会の進歩にとって大きなメリットだと考える。「根拠のまとめ」
- JP052-18 たしかに、一般に言われているように、パソコン画面で表示できる情報は限られており、新聞のような、ななめ読みには向かない。「譲歩」
- JP052-19 しかし、今後の画面表示形式や、検索性の向上によって解決される問題だろう。「反論」

**VI型** 「譲歩」 → 「主張 (=反論) <末尾の最終文>」

次の例は、意見文の末尾で対立する見解（新聞や雑誌は必要だとする見解）への感情的な歩み寄りを見せてから「インターネットだけで十分である」という自らの「主張」を述べたものである。JPに見られた最終文での「確かに」による「譲歩」は、この1例のみである。

例 JP062-15 確かに、新聞や雑誌が少なくなってしまうのもさみしいような気がしますが、それらをバサバサと持ち歩く人は減り、逆にインターネットを利用する人は増えるでしょう。「譲歩」+「主張 (=反論)」<末尾>

**その他**

上記 I ~ VI型のいずれにも該当しなかったものは、「その他」に分類した<sup>(6)</sup>。

以上の型の出現数は、表3のとおりである。

表3 譲歩構造の出現位置と型 (JP)

型	I型	II型	III型	IV型	V型	VI型	その他
出現数	3	25	5	32	3	1	2
小計	33			35		1	2

「確かに」を用いた「譲歩」の典型は、II型 (25例) とIV型 (32例) であると考えられる。II型は、「主張」を明示してすぐに別の見解や異なる主張への理解も示し、いったん「主張」を和らげてから「反論」を加えることで、はじめに述べた自身の「主張」を強固にしようとするものである。IV型は、「主張」をサポートする「根拠」を列挙する際に、「根拠」とするには不足している点や問題点に触れた上で、それを補う特徴を示して「反論」する等の方法により、「主張」を支える「根拠」を盤石にしようとするものである。日本語学習者の意見文指導に際しては、まずこれらの譲歩構造を示し、その機能について理解を深めるのがよいだろう。

表4は、表3に学習者 (TM, KR) の結果を加えたものである。データ数が十分でないため断定的なことは言えないが、末尾で「主張」を述べる際に、その文の中または前で「確かに」を用いる例が、JPと比較して多く見られる。

例 TM011-28 たしかに、インターネットはとても便利し、誰でも使うし、いつか人間の文明の主流になるかもしれないけど、新聞や雑誌など、「存在感」が強くあるものも人間生活の重要な一部分なので、新聞や雑誌は人間にとって必要だと思う。<末尾>

例 KR011-16 たしかに、前よりは新聞を読む人は少なくなるかもしれない。

KR011-17 でも、新聞を好き、文や字を、カミの上の文や字を読むことが好きな人、もっと慣れている人がいる限り、新聞はずっと、私たちの生活の中で、読まれているだと思う。<末尾>

意見文の末尾を「主張」で締めくくる際に「譲歩」を組み込むことによって、「主張」が弱まってしまう可能性もあるため、末尾で「譲歩」する必要性があるのか、慎重に判断する必要があるだろう。

表4 譲歩構造の出現位置と型 (TM, KR との比較)

型		I型	II型	III型	IV型	V型	VI型	その他
JP	出現数	3	25	5	32	3	1	2
	小計	33			35		1	2
TM	出現数	1	4	7	9	0	7	2
	小計	12			9		7	2
KR	出現数	1	2	1	4	0	3	0
	小計	4			4		3	0

### 3. 2 反論の形式

続いて、「確かに」を受けて、どのような言語形式でどの位置で「反論」が行われているかを分析したところ、表5の結果となった。

表5 「反論」の言語形式と位置 (JP)

言語形式	出現回数	「確かに」から数えた「反論」の出現位置					
		同一文	次の文	2文目	3文目	4文目	その他
しかし(しかしながら)	36		19	6	4	4	3
～が	27	26		1			
だが	1		1				
ただ	1		1				
ところが	1		1				
と同時に	1		1				
～ものの	1	1					
けれど	1			1			
非明示的	2						2
合計	71	27	23	8	4	4	5

JPにおいては、全体の63%が「確かに～が、～。」(26例)または「確かに～。しかし(ながら)、～。」(19例)のパターンであり、「確かに」から「反論」までの間に文が挿入されるパターン(18例)も含めると、89%を占めている。この結果より、譲歩構造の典型的パターンは、次のようなものであると言える。

- 例 JP036-07 確かに報道が早いからこそ誤りも多くなりやすいでしょう。  
 JP036-08 しかし新聞や雑誌にも誤りは数多くあります。  
 JP036-09 記者の主観が入りやすいという意味でのリスクも存在します。

例 JP068-05 確かにインターネット上には多くの魅力的な記事が掲載されているが、そのすべてが正確な真実を伝えていると言えるだろうか。

一方、学習者の結果は、表6・7のとおりであった。

表6 「反論」の言語形式と位置 (TM)

言語形式	出現回数	「確かに」から数えた「反論」の出現位置					
		同一文	次の文	2文目	3文目	4文目	その他
しかし	6		3		1		2
～が	14	14					
だが	1		1				
とはいえ	1		1				
ですが	1			1			
でも	1					1	
けど(けれども)	5		5				
非明示的	1						1
合計	30	14	10	1	1	2	2

表7 「反論」の言語形式と位置 (KR)

言語形式	出現回数	「確かに」から数えた「反論」の出現位置					
		同一文	次の文	2文目	3文目	4文目	その他
しかし	2			1	1		
～が	1	1					
だが	1		1				
そうだといえ	1			1			
その反面	1				1		
では(+問題提起)	1		1				
でも	3		3				
どこかで	1		1				
合計	11	1	6	2	2	0	0

上述の典型的パターンの出現率は、JPが89%のところ、TM67% (20例)、KR27% (3例)であり、学習者の方が典型的パターンに収束されず、一見バリエーションが多い。表6・7の色つきの言語形式は、JPには見られなかったものである。「そうだといえ」(「そうだとは言え」)、「どこかで」(「ところで」)の誤用や、誤用とは言えないまでも文章表現では適当とは言えない口語的表現(「でも」「けど(けれども)')も複数回使用されている。また、TMは「確かに～が、～。」の使用が全体の47%を占めており、この形式が典型であると言える。これに対しJPで最も使用が多いのは、譲歩の文を完結させてから、2文目以降で「しかし」というマーカーを明示して反論に移る例である。譲歩してすぐに同一文内で反論まで済ませるより、「しかし」で反論の開始を読み手に宣言し、説得力のある反論を展開していけるような練習を取り入れるとよいだろう。



#### 4 おわりに

以上、小規模で探索的な分析にすぎないが、「確かに」を手がかりに譲歩構造の実態の一端を明らかにした。上級レベルの日本語学習者は、意見を述べる際に単に自分の主張を繰り返したり、好都合な根拠を取り上げるだけでなく、別の立場の見解も取り入れた上で論理的に一貫性のある主張を展開することが望まれる。本研究での試みを指導の手がかりとしたい。

また、本データからは、「確かに～」以外にも、「～は確かだが」「もちろん～」「なるほど～」等の言語形式で「譲歩」する例が見られた。「譲歩」の全体像を把握するためには、これらも含め包括的な分析を加えていく必要があるだろう。

(伊集院郁子 東京外国語大学留学生日本語教育センター ijuin@tufs.ac.jp)

**付記** 本研究は、平成 19 年～22 年度文部科学省科学研究費若手研究 (B) 「日本語母語話者と日本語学習者の意見文におけるモダリティ使用」(研究代表者:伊集院郁子, 課題番号 19720119) の助成を受けている。

#### 注

- (1) 本論では、「意見文」とは、「根拠を挙げながら、あるテーマに関する自分自身の見解を論理的に述べた文章」を指す。よって、個人的体験や感動から発し、主観的感想が述べられるタイプの「投稿」や、著者の思いをつづった「随筆」のようなものは含めない。(伊集院・横田 2010)
- (2) 日本留学試験は 2010 年度より改訂が加えられ、「主張・結論を導き出すに当たって、一つの視点からだけでなく、多角的な視点から考察をおこなうことができるか」という能力が問われるようになる。本稿で分析を試みる「譲歩」も、「多角的な視点」に関わるものであると考えられる。
- (3) 大島他 (2005) では、反論への反論を「反駁」と呼んでいる。
- (4) 分析は「確かに/たしかに」だけでなく、「たしかし」(JP), 「確に」「確しかに」(TM), 「だしかに」(KR) のように、明らかに表記上の誤用と判断できるものも対象とした。また、「確かに」が明示された後に、反論がある場合のみ、譲歩の「確かに」と認定した。よって、次のような例は、譲歩とは認定しなかった。

例 TM033-10 確かに、インターネットはとても便利で、関連記事の検索も短い時間でできる。

TM033-11 受験生などの人にとって、近年の同じジャンルの記事を組み分けたいなら、インターネットが一番速い方法だと思う。

TM033-12 というわけで、私はインターネットと新聞など両方も現代人にとって欠かないものと思う。

なお、例のアルファベットと数字による記号は、「執筆者の国籍+ID 番号-文番号」を示している。また、例文はいっさい誤用の訂正を行っていない。

- (5) 執筆者が設けた形式段落を単位としたが、2段落以下の構成となっていた3編の作文については意味段落を認定し、それを単位とした。
- (6) 「その他」に分類したJPの2例とTMの2例は、いずれも意見文の文章構造が非典型的で機能の流れが独特であったため、IからVIの型に当てはまらなかったものである。

## 参考文献

- アカデミック・ジャパニーズ研究会編著 (2002) 『大学・大学院 留学生の日本語④ 論文作成編』アルク
- 石黒圭・筒井千絵 (2009) 『留学生のためのここが大切文章表現のルール』スリーエーネットワーク
- 伊集院郁子・横田淳子 (2010) 「『JLC日本語スタンダード』に基づいた中級段階における文章表現指導の試みー『意見文』の指導を中心にー」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第36号 pp. 85-100
- 大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂 (2005) 『ピアで学ぶ大学生の日本語表現ープロセス重視のレポート作成ー』ひつじ書房
- 佐藤政光・加納千恵子・田辺和子・西村よしみ (1986) 『実践にほんごの作文』凡人社
- 田代ひとみ (2007) 「中級日本語学習者の意見文における論理的表現」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』第14号 pp. 131-144
- 二通信子・大島弥生・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子 (2009) 『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』東京大学出版会
- 森下稔・鴨川明子編 (2007) 『理工系学生のための日本語表現法ー大学における初年次教育ー』東信堂
- 山本富美子・工藤嘉名子編著 (2001) 『国境を越えて[文型・表現練習編]』新曜社